温泉へ行こう

松崎　武志

この夏休みに旅行・鉄道研究部の部員を連れ、信州・山形方面へ旅行した。部員の旅行記を参照してもらえればお分かり頂けると思うが、今回は土日きっぷを利用した。土日きっぷは、大人用は 18000 円だが、中高生用は 9000 円と半額のため、最近は部の旅行で使われるようになってきた。

今回は横浜で集合し、特急はまかいじ号で松本に行った後、篠ノ井線を北上し、長野に到着した。当初の予定では北長野にある長野総合車両所を見学する予定だったが、直前に不可能となったため、長野で 6 時間の自由行動となった。これまでに京都駅で 3 時間自由行動という計画はあったが、これほど大規模な『解き放ち』は記憶に無かった。

私は生徒を見送った後、新幹線で上田へ向かった。そして、上田から上田電鉄別所線に乗り換え、終点の別所温泉に向かった。このとき購入した切符は、上田－別所温泉の往復の他、終点にある温泉施設「あいそめの湯」が利用できて 1300 円というきっぷだった。とてもお得なきっぷであった。上田－別所温泉は普通に往復するだけで 1140 円、あいそめの湯の入館料は 500 円なので、お得感満載のきっぷだった。

上田電鉄はここしか路線が無いのに「別所線」という名称が付いている。別所線のホームには、見慣れた東急の 1000 系車両が停まっていた。前日から導入されたようで、車内各所で乗客が「新型車両」だと驚嘆の声を挙げていた。

２両編成ワンマン運転のはずなのだが、年配の女性が車掌室に入ろうとしていた。「入れなくなっちゃったんだよ」と運転手に制止され、彼女は運転席との仕切りドア付近に寄りかかり、突然車掌室のマイクを取り、しゃべり始めた。どうやら上田市のボランティアの方のようで、車掌代わりに地元の方言丸出しで沿線案内を始めた。私は後部車両の最後尾に座っていたので、彼女の生の声とマイクを通した声を聞きながら、車窓を眺めていた。

30 分ほどで終点の別府温泉に着き、駅前の案内板を見ると「相染閣あいそめの湯」という表示があるので、そこへ向かった。坂道を登ると、確かにそこに「相染閣」はあった。だが全く人の気配が無く、市からの下請けと思われる人がひたすら草を刈っていた。私は場所を間違えたのかと思って、別所温泉駅に戻って作務衣を着た女性の駅員に場所を尋ねると、逆方向だと教えてもらった。坂を下りていくと新しい大きな建物があり、そこが「あいそめの湯」だった。

入館すると土曜日の夕方ということもあり、たくさんの人が訪れていた。広い内湯に、山々が見える露天風呂があり、とても風情があった。風呂から上がると、高校野球を見ながらくつろいでいる人たちがいた。火照った体に心地よい風を感じながら、駅へ戻って上り電車を待っていると、折り返し列車から鉄研の生徒たちが数名降りてきた。考えることは同じだな

あと思った。

上田から長野へ戻って、再集合した後、長野新幹線で上野に戻り、これで解散すれば話は早いのだが、ここからが鉄研旅行の真骨頂である。そのまま新宿へ向かい、ムーンライトえちご号で新潟へ向かった。自由行動の後、快速べにばな号で白新線・羽越本線を経由して、坂町から米坂線に入り、米沢で乗り換えて高畠へ到着した。

高畠は知る人ぞ知る、駅の構内に温泉「高畠町太陽館」がある。駅に着いて早速浸かってみた。銭湯のような雰囲気であったが、湯の温度はやや熱めで私にはちょうど良かった。日曜の昼間ということもあり、断続的に客が入ってきた。駅も電車に乗る場所というよりは、社交場のような雰囲気で、どこかへ行く訳でもない老若男女が集まっていた。

東京行きの山形新幹線に揺られながら、私はこれまでに訪れた温泉を思い出していた。教員になってからは車中泊の旅行はしなくなったが、学生時代は宿に泊まらず、車中や駅舎を寝床にする旅行をしていたので、旅先で風呂を探すことに大変な労力を費やした。大学一年の夏休みに JR 北海道全線を乗り潰した時は、毎晩夜行特急を宿にしていた。この８月で北海道の夜行特急は全廃となってしまったが、風呂のためならバスや市電を駆使してどこへでも行った。今でも、この辺りには銭湯があるとか、逆にこの町には無いとかが経験としてわかるし、初めて降りた街でも入浴できる場所を探す手順は心得ている。

以前、生徒が立案した計画に沿って旅行したところ、3 日間全く入浴できなかったことがあったので、その後旅行計画を立てる際は、温泉がある場所での自由行動を入れるよう促している。30 代半ばに差し掛かり、鉄研旅行の引率も体力的に厳しくなってきた。旅先での楽しみが無ければ、正直やっていられない。この冬休みは一体どこの『名湯』に入れるのか、今から楽しみである。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「独裁者」と言われるリーダーがいる。最近では小泉元首相が郵政解散の折、そう呼ばれた。政界だけでなく、企業の社長でもその呼び名が付いている人がいる。

鉄研の部長にも後輩からそのように呼ばれた者がいる。彼が部会を始めると教室内は静まり返り、淡々と進められていった。彼の引退後、部会および班に分かれての活動の様子を見ていて、たまに秩序の無い状態に陥ると、彼の手腕やある種の強引さを懐かしく思うことがある。彼は中一で入部した時から、部の行く末を考えていた。この 5 年間で部は確かな軌道に乗った。そして彼の右腕となり、部の会計を支えてきた者がいる。多忙ながらも、部会に参加してくれていた彼にも頭が下がる。

そんな彼らもいよいよ卒業の時がやってきた。6 年間、本当にありがとう。今でも部の行く末を案じてくれているが、まずは自分の希望の進路を歩めるよう専念して欲しい。部員が 40 名近くにまで増えたのは、君たちのおかげです。